

【日本の化粧品原料の未来を変える一步】 社会課題に向き合い、敏感肌ブランド『OSAJI』が 群馬・みなかみでひまわり原料自給プロジェクトを本格始動

採算度外視でも「自分たちの世代で挑む」。
8月、東京オフィスの社員と店舗スタッフが現地に集結。



群馬県のめっき加工を営む町工場（日東電化工業）から誕生し、健やかなスキンケアライフスタイルを提案する敏感肌ブランドOSAJI（オサジ）を展開する株式会社OSAJI（本社：群馬県高崎市、代表取締役：茂田 正和）は、2026年8月7日(金)、群馬県みなかみ町にて、ブランド運営を担う東京オフィスの社員および店舗スタッフ約30名を対象とした「ひまわり圃場・クロモジ精油抽出工程見学会」を実施いたします。

本取り組みは、化粧品原料の輸入依存率が高い日本国内において、地域資源を活用した原料自給の可能性を模索するとともに、人口減少などの地域課題を抱えるみなかみ町との持続的な地域循環の実現を目指し、2018年より継続しているプロジェクトです。

豊かな自然環境を有するみなかみ町で、「地域の中で育ち、地域に還元できる作物とは何か」を探る中で、OSAJIはひまわりに着目。試行錯誤を重ねた結果、2026年初頭には、ひまわりの種から抽出したオイルを製品化できる量の確保に成功しました。

そのオイルを使用した初の商品化を迎えるにあたり、社員自身が製品へとつながる過程に触れ、サステナブルなものづくりへの理解を深めることを目的として、本見学会を実施します。

OSAJIは、本活動を単なる原料調達ではなく、「地域に根ざした循環型のものづくり」を体現し、社員一人ひとりが地域とのつながりやものづくりの背景を学ぶ機会と位置づけています。



■ 開催概要

日 時：2026年8月7日(金) 10時30分～ 11時30分

※天候や圃場の生育状況等により、内容の変更または開催を中止する場合があります。

場 所：群馬県利根郡みなかみ町 たくみの里敷地内 ※詳細は個別にご案内いたします

参加対象：東京オフィスの社員及びOSAJI店舗スタッフ

内 容：地元の協力農家協力のもとひまわり畑・クロモジ精油抽出作業見学ほか

※取材をご希望の方は事前にご連絡ください

■なぜOSAJIが、みなかみでひまわりを育てるのか

<みなかみひまわりプロジェクト概要>

本プロジェクトは、OSAJIブランドディレクター・茂田正和が中心となり、「地域資源を活かした原料づくり」と「日本の化粧品産業が抱える構造課題の解決」を目指して、2018年より試行錯誤を重ねてきた取り組みです。みなかみ町で育てたひまわりの種からオイルを抽出し、最終的にはヘアオイルとして製品化することを目標に、ゼロからのものづくりに挑戦しています。



荒地から開墾した時の圃場

▼みなかみ町が抱える地域課題と、プロジェクト誕生の経緯

群馬県みなかみ町は、豊かな自然環境を有し、ユネスコエコパークにも認定される地域です。一方で、人口減少や高齢化に伴い、耕作放棄地の増加が地域課題となっています。かつて人の営みがあった土地が、少しずつ荒地へと変化していく——その現実には地域は直面していました。

こうした中、みなかみ町役場より茂田へ、「地域の自然環境と人の暮らしが共存する新たな地域づくりを一緒に考えられないか」という相談が寄せられたことが、本プロジェクトの始まりです。その想いは、茂田自身が長年抱えていた「日本の化粧品づくりの未来への危機感」と重なりました。

▼日本の化粧品産業が直面する“原料調達”の課題

現在、日本の化粧品原料の多くは海外からの輸入に依存しています。近年は、Kビューティーをはじめとする世界的な化粧品市場の成長により、原料調達競争が急速に激化しています。このまま輸入依存が進めば、将来的には「日本国内で安定的に化粧品をつくり続けること」が難しくなる可能性もあります。元々、群馬県のめっき加工を営む町工場から誕生したOSAJIにとって、日本の「ものづくりの現場」が衰退していく危機感は創業時から根底にあるものです。

だからこそOSAJIは、こうした状況を単なる原料問題ではなく、「日本のものづくり基盤そのものに関わる課題」だと捉えています。地域で育て、地域で還元し、国内で循環していく仕組みを少しずつでも増やしていくこと。その実践の一つとして、この“ひまわり栽培”に取り組んでいます。



採取したひまわりオイル



群馬県の小学校での「これからの工業生産とわたしたち」がテーマの社会科の授業

▼私たちの決意とこれまでの歩み

「国産原料比率を高めることは簡単ではない。けれど、自分たちの世代が挑戦しなければ、その未来は始まらない」

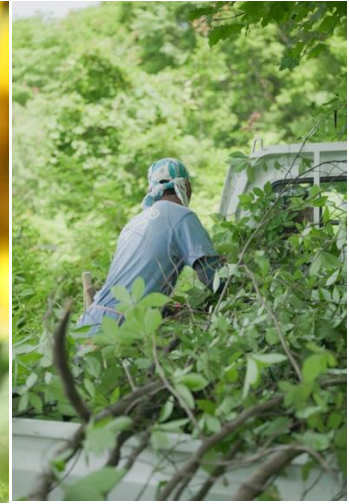
その想いのもと、植物や海洋資源、酒粕など、日本各地に存在する未活用資源の化粧品原料化に挑戦しています。

本プロジェクトは、単なる地域連携や農業体験ではありません。地域課題、原料自給、サステナブルなものづくり、人材育成、それらを横断する、“これからの化粧品産業のあり方”を模索する実践でもあります。

OSAJIは、肌だけでなく、地域や社会の健やかさにも向き合うブランドとして、日本のものづくりの未来に挑戦していきます。

※関連 OSAJIが10周年を前に問い直した“存在意義”。—『人生をドラマティックに、世界をロマンティックに。』が生まれるまで。 <https://prtimes.jp/story/detail/rQq3g0sKpYr>





「みなかみひまわりプロジェクト」は、化粧品原料の栽培という枠を超え、地域との新たな関係性を育む取り組みへと進化しています。

ひまわり畑で生まれた小さな挑戦は、今、地域住民や農家、福祉事業所を巻き込みながら、“地域の未来をともにつくるプロジェクト”として広がり始めています。

【地域から広がる共感と期待】

「化粧品の原料となる花を地域で育てる」という取り組みは、みなかみ町でも少しずつ話題となり、地域住民や地元農家から関心や期待の声が寄せられるようになりました。特に近年は「使われなくなった畑を活用してほしい」といった具体的な相談も増加。耕作放棄地の活用という観点でも、地域との連携が広がっています。

【新たに始動した農福連携】

2026年からは、新たに地域の社会福祉事業所との農福連携をスタートしました。

すでに、畑づくりや育苗作業を共同で進めており、今後は植え付けや収穫など、より本格的な協働フェーズへ移行していきます。化粧品原料づくりを通じて、地域に新たな役割や関わりを生み出すこと。

本プロジェクトを「地域資源」「人」「仕事」がゆるやかにつながる持続可能な仕組みづくりとして捉えています。

【3つのアップデート】

1. 作付面積を前年比約2倍へ拡大

今年は、継続的な商品化を見据え、作付面積を前年のおよそ2倍（2.8反→5.6反）に拡大しました。

2. 栽培手法を改善

去年は、畑へ直接種をまく栽培方法を採用していましたが、一部で鳥害による被害が発生しました。

今年はその課題を踏まえ、一度苗として育ててから畑へ移植する方式へ変更。生育の安定性向上と、より確実な収穫を目指しています。

3. 地域資源を循環させる取り組み

今年の一部の圃場にて、地元酪農家から提供いただいた完熟堆肥を活用しています。

地域で生まれた資源を地域の土壌づくりへ還元することで、持続可能な農業と循環型のものづくりを実践しています。



■担当者コメント



みなかみ町協力農家 | 林英汰さん

昨今の世界情勢や各種業界での課題がある中で、農業においても目先から長期にわたって課題が山積みです。今回のプロジェクトが始動し参画したことで、僕自身の農業観に視点が一つ増えたように感じました。食にまつわる農業から、生活、スキンケア、心の拠り所につながる農業もあるんだなど。僕自身、「農業の分岐発展」をテーマに活動している中で、地域の産業から世界に響き渡るような価値を創っていけると感じています。

Profile

群馬県昭和村出身。祖父の代から続く農家に就農し、レタス栽培に従事。冬季はスノーボードインストラクターとして活動するほか、アグリツーリズムのための貸し宿の運営や体験プログラムの引率など、地域資源を生かした多角的な取り組みを行う。みなかみ町では耕作放棄地の再生プロジェクトに参画し、ひまわり栽培の管理を担いながら、農業の新たな可能性を模索している。

OSAJIブランドディレクター | 茂田正和

食の世界と同じように、実は化粧品の世界でも、日本は多くの原料を海外に依存しています。現在、東南アジアをはじめ世界中で化粧品の需要が急速に高まっており、将来的には日本に原料が回ってこなくなる、そんな未来も決して他人事ではありません。髪や体を洗うこと。仮に化粧品がなかったとしても人の生死には関わらないかもしれません。しかし、私たちが文化的で豊かな生活を送るためには、必要不可欠なものです。

このような大きな社会課題に向き合うプロジェクトではありますが、いざ自分たちの手でものづくりを始めてみると、そこには言葉にできない充実感や、人との温かい出会い、語らいがありました。それは何よりも楽しく、ワクワクする経験です。私たちのこの取り組みが、単なる「社会課題への義務感」としてではなく、これからの未来に楽しく向き合う輪を広げるきっかけになってくれたら、これほど嬉しいことはありません。

■これまでの歩み

本プロジェクトの取り組みは、自社オウンドメディア「OSAJI Journal」にてレポート配信を行っています。

“化粧品をつくる”だけではない、OSAJIが目指すものづくりの背景をご覧ください。



読む美容

OSAJI Journal

■報道関係者の皆さまへ

ひまわり園場・クロモジ精油抽出工程見学会は、以下の観点から取材素材としてご活用いただけます。

<当日取材可能な内容・撮影ポイント>

- ・群馬県みなかみ町の耕作放棄地から開墾し、ひまわりの栽培を続けてきた園場の様子
- ・たくみの里にある蒸留所にて、みなかみの里山で収穫したクロモジから精油を抽出する様子
- ・企画開発担当者・ブランドディレクターへのインタビュー（プロジェクト背景や今後の展望）
- ・園場を背景にした集合撮影・交流シーン



OSAJIブランドディレクター・CEO 茂田正和

音楽業界での技術職を経て、2001年より化粧品開発者の道へ。皮膚科学研究者であった叔父に師事し、敏感肌でも安心して使える化粧品づくりを追究する中で、感性を育む五感からのアプローチの重要性を実感。

2017年、スキンケアライフスタイルブランド『OSAJI』を創立しディレクターに就任。2021年にOSAJI店舗に併設のホームフレグランス調香専門店「kako-家香-」（東京・蔵前）が好評を博し、2022年には香りや食から心身の調律を目指す、OSAJI、kako、レストラン『enso』による複合ショップ（鎌倉・小町通り）をプロデュース。2023年は、日東電化工業株式会社の技術を活かした器ブランド『HEGE』を手がける。2023年10月株式会社OSAJI代表取締役役に就任。著書『42歳になったらやめる美容、はじめる美容』（宝島社）、『食べる美容』（主婦と生活社）

公式Instagram：[@masakazushigeta](https://www.instagram.com/masakazushigeta)



OSAJIとは

江戸時代、大名や将軍に仕える医師を、匙を使って薬を調合するすがたになぞらえ「お匙（おさじ）」と呼びました。皮膚が体の免疫を司る重要な器官と考えられる今、スキンケアの役割は美容のためだけのものにとどまりません。オサジは健やかで美しい皮膚を保つためのライフスタイルをデザインする、現代の「お匙」でありたいと考えます。

皮膚の構造や機能、そして、皮膚はどのようにして健康と美しさを保つのか。その一つひとつに真摯に向き合い、アレルギーに対してリスクのある成分は極力入れないようにしています。フェイシャル、ボディ、ヘア、メイクアップ、フレグランスを取り扱っています。

<https://osaji.net>

OSAJI Inc.

【メディア関係者様 お問い合わせ先】

株式会社OSAJI コーポレート広報担当：酒井
メールアドレス：yoko.sakai@osaji.inc、電話：080-6051-1797